

服部正治・竹本洋編『回想 小林昇』

(日本経済評論社, 2011年)

熊谷次郎

小林昇 (1916-2010, 敬称略) を中心とするサークルは、本書で中野好之が言うように、旧帝大の研究室を囲む同族意識の強い同窓会的な基盤とは対照的に、福島大学や立教大学という「周囲に無差別なまでに開かれた中間的な地縁が育む自由な雰囲気」に満ちていた(252)。本書では、そうした小林の開かれた精神と、「あらゆる地上の欲望を絶って学問をする」(水田洋, 174) 禁欲的な姿容と、自信に満ちていながらも「どこか可愛げがあり、人懐こく、情に篤いところがあった」(長女・松本句子, 338) 風貌、ならびに彼が経済学史研究に印した巨歩と残された課題とが、29人の執筆者によって回想される。最初に執筆者(肩書きは各執筆者の文章末尾のものを使用)とその題目の一覧をあげておく。

『回想 小林昇』編集にあたって(服部正治・立教大学教授)

第 部

18世紀経済学の2つのテキスト(大森郁夫・早稲田大学教授)

小林昇における学史と思想史の「試行錯誤的往反」の可能性をめぐって(坂本達哉・慶應義塾大学教授)

アダム・スミスの農工分業論と賃金論における有効需要の問題——小林昇説への問題提起(新村聡・岡山大学教授)

『国富論』の定位置——「新版アダム・ス

ミス問題」とケンブリッジ学派(毛利健三・東京大学名誉教授)

追悼 小林昇(ベルトラム・シェフォールト, フランクフルト大学経済学部教授)

小林昇先生の経済学史と思想史・経済史——高い山脈と低い山々(柳澤治・東京都立大学名誉教授)

小林昇先生のリスト研究と現代の視点, そしてこれから(原田哲史・関西学院大学教授)

『国民的体系』のリストと『ライン新聞』のマルクス——ブリュッゲマンを中心に(諸田實・神奈川大学名誉教授)

小林昇の経済学史研究とフランス経済学史(米田昇平・下関市立大学教授)

導きの糸としての「固有の重商主義」論(岩本吉弘・福島大学教授)

第 部

回想の小林昇(水田洋・日本学士院会員)
“文体”のある生涯(松本昌次・編集者, 影書房)

『国富論』研究における小林さんの視角(羽鳥卓也・岡山大学名誉教授)

無私の人(田中正司・横浜市立大学名誉教授)

小林昇先生への思い(住谷一彦・立教大学名誉教授)

叙情の詞と窮理の語——小林先生の「カタルシス」をめぐって(船木拓生・演劇)

小林昇先生の思い出 (田中敏弘・関西学院大学名誉教授)

小林昇先生のこと (山崎怜・香川大学名誉教授)

小林さんから受けた感化 (中野好之・社会思想史)

補充兵と経済学——小林昇全歌集『歴世』に寄せて (佐藤清・コア建築審査事務所代表)

小林昇先生と日本学士院 (根岸隆・日本学士院会員、東京大学名誉教授)

最後の師匠——小林昇先生の思い出 (大倉正雄・拓殖大学教授)

小林昇先生と京都 (田中秀夫・京都大学教授)

小林昇先生とこけし (渡邊格・元原郷のこけし群西田記念館勤務)

邂逅の重畳 (菊池壯蔵・福島大学教授)

尊敬する友人にして誉れ高き学者、小林昇教授の思い出 (オイゲン・ヴェンドラー、ロイトリンゲン大学 ESB ビジネススクール名誉教授)

批判的知性の覚悟と疲労 (竹本洋・関西学院大学教授)

父と母の思い出 (松本句子・小林昇長女)

あとがき (服部正治)

小林昇著作・短文目録

小林昇年譜

第 部では、小林の研究領域と関連する研究者たちが、小林の研究を評価したうえで、その研究の問題点や残された課題を論じる。第 部では、文学・短歌・こけし・評論などの分野でも優れた仕事を残した小林との交流の模様を、さまざまな分野の人々が回想する。編者のひとり服部正治は、立教の大学院で直接小林の薫陶を受け、その後継者として立教の経済学史を担当している。服部は19~20世紀のイギリス経済学史を通商政策の展開との関連で研究しているが、とりわけ自由貿易

と保護主義、ならびに穀物論議の学史における位置づけを研究テーマとしている。もうひとりの編者竹本洋は、大学で小林に直接師事したことはないが、田中正司 (学部) と真実一男 (大学院) の門で学ぶなかで、おのずから小林の学風に親しみ、その学統をもっとも真摯に受け継いでいる一人である。

小林昇とはどのような人であったのか。的確かつ印象的な表現で描かれた小林昇像をまず直接引用しておこう。

「小林昇は日本の古い流儀の学者の真骨頂を体現した、礼儀正しく・繊細で教養溢れ、自身が生涯かけて研究した人物に関してはきわめて的確な知識をもつ学者」(リスト研究者・シェフオールト, 73)。

「類いまれな教養を持つ博識の学者であり、フンボルトの学者の理想像を具現化した人」(リストの農地制度論が『国民的体系』理解にとって根本的な意味をもつことを小林から学んだというリスト研究者・ヴェンドラー, 316)。

「その立っても座ってもまっすぐな姿勢、いつも好奇心に溢れる純な目、猫に遣る視線、むだのない発語、その警咳、専門書を含めて傍線やメモが全くない蔵書、全く訂正や挿入のない私信、青インキによる細く小さい文字縦列」(演劇家・船木拓生, 227)。

散歩でも「背筋を伸ばし、ジャケットを着、ソフト帽をかぶり、外出し」、「いつもお洒落できちんとしていた。胸ポケットに櫛を入れて、帽子を脱ぐと整髪した」(松本句子, 336)。

このような碩学が、日常の普通の生活者であることを心がけながら、学問研究にどのような心構えや姿勢で接していたのか、という点がおもに第 部では紹介される。本書の構成にしたがって、まず第 部から見ていこう。

本書の帯には「経済学の生誕と終焉をみすえ、その思想と人格とを<文体>に結晶させた生涯を多くの知己が語る」とある。これはおそらく出版社が作成したコピーであろうが、

「終焉をみすえ」たとは、優れた業績を残した小林昇経済学史研究から何を学ぶかという観点から見れば、いささか過激に走ったという印象を受ける。だが本書を読むと、こうしたコピーを書きたくなくなる気持ちもわかる。竹本洋は小林の短歌「この人の思想の奥の『見えぬ手』をわれは疑ひて年を経にけり」に、スミスの予定調和的な信念に対する「根深い疑念を抱きながら、彼とともにあった長い研究生活の名状しがたい倦怠が表白されている」と読みとり(322)、水田洋はステュアートを「神なき学」と詠った小林に対し「気に入った」と、水田らしい声をかけ、しかしこれに(小林昇のニヒリズム?)と短評を付している(180)。また羽鳥卓也は、小林のイギリス重商主義研究やリスト研究には、『国富論』の「原罪」の奥にはいつて見たいという「半ば無意識的な意図がつねにはたらいていた」という小林自身の文章を引用している(192)。山崎怜も「どうしても最後に言及しておきたい」として、小林が1970年代に「GNP的生産力」の向上を追求する経済活動を批判して「マイナス成長のすすめ」を提唱し、その後も原発や生産力至上主義への疑問など、人類の直面する問題に警告を発していたことに注目する(244)。田中秀夫によると、京都(大学)ではオイルショック後の小林の「低成長の勧め」は、国民経済の形成と発展の論理の追求という小林の学史研究の思想の破綻ではないかという議論もあったという(293)。

しかし経済学史や経済思想史を研究する者が小林から引き継ぐ視点は終焉論の方向(上記の人々がそうであるというのではむろんない)ではないだろう。「GNP的生産力」批判と「マイナス成長のすすめ」を経済学終焉論へと進めていくよりも、「過去の諸作品を深く沈潜して読み、かつその時代状況に照らして理解することから自然と湧き上がってくる、古い思想の脈絡を明らかにするという[小林の]方法」(原田, 113)を引き継いで研究対

象に迫ることが課題であろう。こうした観点から原田哲史は、第一にマルクス、スミス、リストと同系列の「生産力の神話」にとらわれない、リストと同世代人の「非生産力主義の経済思想」の検討(F・V・バーダーとA・ミュラーを代表とするドイツ・ロマン主義の経済思想)、第二に財の価値を使用価値に求める、なかでも個人の主観的な有用性よりも社会・国家全体における有用性を重視する「ドイツ古典派」(F・J・H・ゾーデン, J・F・E・ロッツ, K・H・ラウ)の研究の重要性を指摘する。これらの研究から小林が提起した、「真の必需品——大衆の合意にもとづき社会的価値基準にもとづいて決定された——の生産」というテーマを生かす道が見いだされるのではないかと彼は言う(114-15)。

米田昇平は、「スミス自身の責任はともあれ、虚無的科学与無限の浪費と人間喪失と地球の破壊との時代へ扉を開いた」という小林の文章に言及し(149)、こうした小林の現代経済学批判の姿勢を学史研究に生かす道を、小林の豊穡な研究領域(「デルタ」)の「さらなる戦線の拡大」に求める。それはフランス経済学史との関連では、モンテスキュー(『法の精神』)ステュアート(『原理』)の連接関係(政治学 経済学)と、スミスにおける『法学講義』から『国富論』への発展(法学 経済学)との対比によって、イギリス経済学の成立過程の多様性と、その過程におけるフランス・コンテキストの影響のあり方の一端が浮き彫りにすることであると言う(150-51)。

岩本吉弘は、吉田静一のフランス版「固有の重商主義」論は、本来、研究の導きの糸とすべき小林の「固有の重商主義」論を機械的にフランスに適用した悪しき例であったとしたうえで、小林の「固有の重商主義」論を「導きの糸」とするにはどうすべきかを論じる。「固有の重商主義」論は、岩本によれば、学史上のある「理論の段階」を整理する筆筈

の「引き出し」のようなものであり、そこに納める中身は、小林の場合、自立した思考と緻密な実証性によって決められたが、吉田はフランス史のなかから小林の作った「引き出し」に合うものをだけを選択し、実証や論理構造の分析を徹底せずに、それを加工・収納するという誤りをおかした。小林がそうしたように自ら採寸して作るべき「引き出し」として岩本が念頭に置くのは、カンティロンやグルネ・グループなど18世紀以前のフランス経済学の文脈を19・20世紀にまで繋げていくものとして津田内匠が提起した「ディリジスム」という包括的な概念である(166)。

小林の主要フィールドのひとつ『国富論』研究では、スミスの「資本投下の自然的順序論(資本の投資効率優劣論)における重商主義的残滓とその理論的破綻とを論じる小林に対して、この問題で長年好論敵であった羽鳥が、小林自身の次のような言説、すなわち『国富論』を従来よりも一層広くその同時代の経済思想・経済理論の「輻輳する陰影のなかに置いて理解」という言説に即して考えれば、19世紀初頭にマルサスがスミスの資本投資効率の優劣論を基本的には是認したことを、どのように考え、あるいは処理されるのだろうか、と問うている(198-200)。

大森郁夫は、「資本投下の自然的順序」論の重商主義的残滓という小林説を是認したうえで、重商主義を克服した次の段階、すなわち「自然的順序」が達成された後、産業構造(あるいは国民経済)内部における諸部門間の要素報酬率均衡化メカニズムを理論的把握しなければならない段階の議論を、小林が「諸産業の自然的均衡」として論じている点を「諸」ではなく「産業の自然的均衡」として捉えるべきだと主張する。「産業の自然的均衡」が労働と資本といった生産諸要素の最適配分、さらに言えば利潤率均等化メカニズムそのものを意味するならば、「諸産業」である必要はないと大森は言う。そして小林が

「諸」にこだわるのは、産業構造内部における諸部門で要素報酬率が均衡化するメカニズムを資本投下の自然的順序論の延長線上で考えているためではないだろうか、と疑問を呈する(12-14)。羽鳥や大森の議論に見られるように、資本投下の自然的順序論をめぐる議論の着地点の確定は依然論争の渦中にあるようだ。

新村聡は、ステュアート(原始蓄積の経済理論)とスミス(資本制蓄積の経済理論)の経済理論を比較して、後者が前者を批判し乗り越えていった過程を明らかにすることが、小林経済学史研究における最も重要な基本視角の一つであり、それは正当な課題設定だとしたうえで、しかし小林はステュアートとスミスが有効需要論という土俵上で理論的に対決していたことを十分に認識しなかったように思われると批判する。これは理論段階の相違——岩本風にいえば「整理筆筭」の「引き出し」——を設定しながら、その中身は小林自身においても入れ違いがあったということであろうか。新村は、マンディヴィルとステュアートの有効需要論が、地主などの富裕層と召使い・兵士などの不生産的労働者の消費需要を容認することにつながるものであるのに対して、ヒュームとスミスの有効需要論は、農工両部門における生産的労働者の消費需要を重視するものであるから、理論・思想・政策における太い境界線は、小林がそうしたように、ヒューム・ステュアート対スミスとの間に引かれるべきではなく、マンディヴィル・ステュアート対ヒューム・スミスの間にこそ引かれるべきであると結論する(50-51)。

ヒュームとの関係で問題を提起しているのは坂本達哉である。坂本は、小林が学史家としての立場に方法的に禁欲し、ヒュームを含む本格的な哲学・思想の古典については、少なくとも学問的な発言は抑制するという態度を原則的にとっていたが、『重商主義解体期の研究』(1955年)ではこの原則を大胆に踏

み越え、例外的な思想史的考察をおこない、大きな学問的成果をもたらしたと評価する。ところが、『解体期の研究』の一部をなすヒューム理解においては、小林は信頼する同僚・田添京二のヒューム論（本田喜代治・水田洋編『社会思想史』1954年所収）を採用するという便宜に頼ったと坂本は言う。「ヒュームの構想した壮大な社会科学体系は、とりわけ経済の領域でウィークであった。それはせいぜい強気の経済時評といった感じだった」というのが田添のヒューム論の核心だが、「この一面性と偏見は隠しようもない」議論を、小林はタッカーとの関係におけるヒューム思想の否定的な特徴づけに適用した。もし小林が学史家としての文献実証の厳正な方法をヒューム思想の分析においても適用していれば、このような結果にはならなかったはずであった、と坂本は残念がる（32-33）。ヒュームは小林にとって弱い環であったようだ。

毛利健三は、小林がわが国の思想家のなかに見られる傾向として、『国富論』と『道徳感情論』との「亀裂を敏感に察知するがゆえに」スミスの道徳哲学から『国富論』を切り捨てて「市民社会の純粋な理念を守ろうとする傾き」にあるという言説（『著作集 国富論：研究（2）」「あとがき」）に注目し、これを「アダム・スミス問題」の再提起と理解する（53）。そして『国富論』出版200周年（1976）以後のウィンチ、ポーコック、ホント、イグナティエフなどの論著を論評した後、西洋思想の長年の懸案のスミスの解決形態、すなわち近代的生産力の飛躍的發展による「普遍的富裕」の実現は、「正義」と「必要」との真の和解をもたらしたのだろうか。なによりもスミス自身はそう考えていたのであろうかと問う（67-68）。毛利は生産力格差に焦点を絞った未開社会との比較に依拠する「文明社会」論と、そこから帰結するスミスの「普遍的富裕」概念の歴史的・方法的限界は明白であると言う。しかし、「普遍的富裕」概念

の限界を突破する契機は、スミスが消費税を論じる際に展開した「生活必需品」の規定、つまり時代とともに変化する社会通念に照らして「信用のおける人」として「恥ずかしく」も「見苦しく」もない生活諸機会を「最下層の男女」に対しても保証する諸資料・諸手段という「生活必需品」の規定のなかにあるのではないかと論じる（69）。ここには上記の原田の問題関心と連なるものがあるように思われる。

リストの理論や政策が、3月革命の中でどのように実現化したかを検討する柳澤治は、小林が指摘したリストの2面性——資本主義の推進者にして国内産業の保護と育成を目指すリストと、帝国主義的な植民運動の端緒を開いた農地制度論でのリスト——は、3月革命期の産業資本のイデオログであったリスト主義者の特質でもあったことを明らかにする（99）。柳澤はまた、ドイツ歴史学派をステュアート、スミス、リスト、マルクス、メンガー、マーシャル等の「経済理論が聳える高い山脈にかこまれた低い連峰」（この表現自体は住谷一彦のもの）と見る小林に対して、「低い連峰」は一方では「高い山脈」に、他方では村や町の生活に連なり、両者を結びつける役割を果たしており、こうした視点をもつことが、「経済学・思想がもつ多面性とそこに潜む本質を、幅広い、そして柔軟な視点に立って思索し分析された小林昇先生の経済学史研究」の継承であろうと言う（104）。

諸田實は、ドイツの保護制度＝関税同盟のために命がけで行動した「行動の人」リストの「行動の軌跡」を、『国民的体系』出版後の賛否渦巻く書評を通して紹介し、マルクスの『ライン新聞』がリストの『関税同盟新聞』に対抗する「適任の論争相手」として保守主義の強硬な自由貿易論者ブリュッゲマンに紙面を提供したことを跡づけている（133-34）。マルクス研究者にも興味深い論考であろう。

以上は本書における小林昇経済学史研究の成果と問題点の指摘であるが、次に第 部の執筆者の回想をもとに、小林の学問観、人生観、生活観、趣味などを概括的に見ておきたい。

(1) 研究対象を限定し、そこに禁欲し沈潜する

かねてから小林に「君に弔辞を読んでもらって死にたい」と言われていた水田は、内田・小林論争(1954-55年)の命名者であるが、「内田君は不摂生」だ、「内田君は古版本を読んでいる」と小林が言うのを聞いている。不摂生とは内田の健康への配慮であるとともに、内田の研究領域の拡大への批判でもあった。小林は古版本を読むことによる書誌的な視野の拡大をはかりながら、そこから選び取った研究領域そのものの拡大にはきわめて禁欲的であった。禁欲した分野を超える広範な領域への実証的研究を進めながら、敢えて対象を絞るというのが、小林の学問に対するマナーであった。タッカーの全著作を視野に収めながらタッカーの市民政府論には踏み込まなかったのはこのゆえであり、社会思想史学会に入らなかったのもこのゆえであった、と水田は語る(173, 177-80)。

(2) 学問は孤独な仕事である

立教大学大学院経済学研究科の院生機関誌の「創刊に寄せる」(1967年)で小林はこう書いた。「学問研究の態度として欠くことのできないものは、権威への懐疑と厳格な自己審査である」(342)。大森が今も座右にしている小林からの私信には「孤独をおそれること勿れ、群れとともにあることを戒慎せよ」と書かれているという(14)。竹本も小林が、浅薄な者がそれゆえに群れたがことを軽蔑し、「独りで研究を持續しうることを大切な才能の一つだと話されたことがある」と述懐する

(327)。山崎は戦後民主主義のイデオロギーやマルクス主義に影響を受けた当時の大道から身を遠ざけ、「ひたすら無名学説の内部耕作に専念される小林先生の小径」、「その地味で孤独な小径」を畏敬をもって追想する(236)。こうした孤独への覚悟が、輸送船が沈没して海に投げ出され、九死に一生を得たことから始まる、小林のヴェトナムでの戦争体験(1944年8月-46年4月復員)にその根幹があることは、多くの執筆者が言及している。長女の句子は「戦地での経験は、父のその後の人生にある力を与え、同時にある醒めた感覚を植えつけたように思う。それが精力的に仕事をしながらもグループを作ることを嫌い、短歌もひとりで続けた父のスタイルを決定したのだろう」(337)と語り、小林の活動の精神の深奥を描いている。小林自身の表現では、「明日に期待せず今日を生きることに足る」との覚悟のもと孤独な研究を持續させ、全11巻の著作集を紡いだのであるが、この金字塔にも小林は謙虚であった。竹本はこの点を、「孤独への覚悟とはその行路での労苦を胸にたたみながら、果たし得た仕事もその評価も一次の僥倖と思ひ定め、身を軽やかにする心構えのことである」と忖度する(324)。

(3) 学問、日常生活、下からの目線

小林は日曜大工的な仕事がまったく不得手な徹底的な書齋人であり、終電車に乗ったのは生涯で多分一度だけというような(根岸, 275)、ある意味超俗的な印象を与える学者であるが、日常生活を低く見下ろす高踏的なところはなかった。「学問では技よりも心が大切」ということを指導教授小林から学んだ大倉正雄は、「世俗的な世界に身を置き、普通の健康的な生活を営みながら、学問的営為を持續すること」の大切さも小林から学んだという(277)。縁あって大塚久雄宅の敷地内別棟で生活する機会をもったことのある菊池壯

蔵は、そこで大塚、大河内一男、内田義彦、小林の日常の所作に接する機会があったが、その観察から、小林には大塚、大河内、内田に見られる、上からの視線がなく、近隣住民との付き合い方も心得えた「現実感覚」の持ち主でもあったと言っている。そしてそれは兵卒としてヴェトナムで体験したキャリア司令官の兵卒に対する不遜な態度に対する嫌悪と通じていたのではないかと推測する(311)。こうした特権的なものへの嫌悪が、晩年小林が海外研究の筆を絶った理由であることを、田中正司(206)や佐藤清(歌集『百敗』から「兵われはただに虚しく帰還せり森軍医監は凱旋をせり」を引用、264)などが述べている。

(4) 学問、文体・文章、短歌

「社会科学の達成もまたその文体とともにあることの範例」が山田盛太郎の『日本資本主義分析』であると小林は書いている。独特の概念や晦渋な術語を重ねる山田の文体の評価は措くとして、小林は「日本の社会学者、ことに経済学者の果たしていくたりが、自己の文体を以って自己の著作を書くという意識に徹しているだろうか」(『帰還兵の散歩』)と厳しく迫る。編集者松本昌次は“文体”のある生涯と小林を回想するが、小林が研究者の条件としていかに文章文体を重視したかは、博士過程の演習初回に論文原稿の提出を求められ、その原稿の文章を容赦なく批判された経験をもつ大倉が語っている。「文章に始まり文章に終わるという意味でシンプルな指導」が小林流であった、と(279-80)。小林の「学問的成果の、緊密に整った形態」である文章が「作詞体験の中で鍛えられた散文」(水田、175)であるという認識は、多くの執筆者に共有されている。「飾りのない、譬えれば細い綱のような先生の文章」に魅せられた船木は、小林の文章形成のメカニズムと

「独詠による生理的カタルシスの様態(メカニズム)が深いところで関わっているように感じる」(215)と述べる。小林の短歌の弟子で「こけし」の西田記念館設計者でもあった佐藤清の目には、『歴世——小林昇全歌集』(2006年)は学史研究と表裏をなして展開された「一つの自伝的文学作品」と映った(266)。

(5) 福島と趣味のこけし

小林は1940-55年の福島高商 福島経専 福島大学の時代を「澄明な音楽の響きのなかにいるような」至福の生活を送ったと回想し、研究者としての彼はそこで培われ、「そうして培われたものを生涯大切に守ってきたつもりである」と述べている(297)。長女旬子も、保険会社の社員から教師になって、やっと自分の力を発揮することができる場を与えられ、生き生きと仕事に取り組めたのが福島時代であったから、小林は生涯福島を懐かしんでいたと追想する(337)。その福島時代の終わりの頃から、小林は同僚教員の感化で「こけし」に親しむようになり、それはやがて、福島大学卒業生・渡邊格、「東京こけしの会」の西田峯吉、福島の東邦銀行頭取・瀬谷俊雄とともに「原郷のこけし群西田記念館」設立(1995年開館)へと向かった。そして小林の収集した約160点を超えるこけしはそこに寄贈された(303)。

本書には編者による現在望みうるもっとも完成度の高い「著作・短文目録」と「年譜」が収められている。この点で本書は『小林昇経済学史著作集』(全11巻、未来社、1976-89年)の補遺ともいえよう。また本書の第一部の議論に関心をもつ読者には『立教経済学研究』第65巻第2号(2011年10月)の特集「小林昇経済学史をいかに受け継ぐのか」の併読をお勧めしたい。

(日本経済評論社、2011年12月刊、viii + 383頁、2800円 + 税)